

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 6



2011 冬

目次

初夏のあとさき……荒木絹江……	2
鷹現るる……石井宏幸……	4
秋……井上悦男……	6
初夏から秋へ……植田桂之……	8
十二月……梅田光憲……	10
菊師と菊花展……奥山登志行……	12
夏の名残り……金尾一志……	14
琥珀の秋陽……工藤久美子……	16
いのち 二……小六誠一郎……	18
伎芸天……桜本滋子……	20
秋……角南房子……	22
春を待つ……高城登代……	24
黄落……谷口利子……	26
一〇句抄……富阪宏己……	28
朝戸出……長尾京子……	30

四条から……名木田純子……	32
短日……西村正子……	34
旅涼し……信里由美子……	36
風……蓮岡健美……	38
春から秋……與田武彦……	40
秋草……米元ひとみ……	42
寝転べば……渡辺牛二……	44
星空のランデブー	
……富阪宏己……	46
青春きつぷ……名木田純子……	51
セーターの闇……石井宏幸……	53
編集後記……渡辺牛二……	54

初夏のあとさき

荒木絹江

緑蔭を波たたせたる鐘一打

麦秋の風に大地の揺れもどす

青空の吸ひあげてゐる新樹冷

高千穂の奈落を漕げるボートかな

残鶯と九重連山巡りをり

田植水街川までも濁らせり

水無月や魚拓の鰭の伸び縮み

さみだるる空を電波の飛び交ひぬ

扇また苛つくまゝを音に出し

街騒の短夜きざむ花時計

鷹現るる

石井宏幸

鷹現るるより一天の尖りけり

高みつつ別れて鷹の太虚かな

引鶴のごとくに虚子のふところに

吾子遠くして春雪の夜と変はる

散る花もなく水の去りゆきにけり

切株の抱く堇や奥社径

星一つ上げて牡丹暮れにけり

水芭蕉水湧く森の雲まとひ

岩燕風色の尾を空に垂れ

苗籠のなほもまどろむひとところ

秋

井上悦男

単線の川また川の水澄めり

魚影みな数ふるほどに水澄めり

せせらぎを真上にのせて秋の鮠

風に来て風に止まつて赤とんぼ

夕月や犬抱き上げて長話

月見てふ夜遊びひとつ覚へけり

そぞろ寒無人駅にもある別れ

手探りに鍵穴さぐる虫の闇

洗ふ菜の水にもしがみつく菜虫

子の名前残る辞書引く夜長かな

初夏から秋へ

植田桂之

初夏や木洩日踊る石畳

水底に影泳がせてあめんぼう

法師蟬奏づる調べレクイエム

文月や一息いるる風の道

秋立つや雲の形に空の色

暮れ残る入道雲の白さかな

木犀の香るとき母想ふとき

箒目の残る境内こぼれ萩

眉月の懸かる秋の夜人恋し

楷の木の紅葉闇に浮び出づ

十二月

梅田光憲

同じ店同じ座敷の年忘

芸達者又一人減る年忘

七輪へ継ぎ足す炭を炭で割る

湯豆腐の動き出したる音掬ふ

檜櫓櫓とも知らず炭を継ぐ

色つきの酒にも会へる十二月

赤信号に又ひつかかる十二月

数へ日の嵩ある葉袋かな

砕く音砕け散る音冬怒涛

まだ何も捨つるもの無し冬怒涛

菊師と菊花展 奥山登志行

庭隅も手入れの光る菊師邸

数百の鉢馥郁と菊の波

病には蝶も大敵菊手入れ

鶴唳の園に木霊の菊花展

菊花展客の食ひ入る眼の並ぶ

大輪の菊曼陀羅や香を放つ

福助てふ居ずまひ正す菊の鉢

達磨てふ転びさうなる菊の鉢

石組の幽谷語る菊盆栽

小屋たたみ一氣に果つる菊花展

夏の名残り

金尾一志

父の頭に似て我影や夏帽子

西日負ひ帰るや肩に荷の如く

夕風や暗き河口に廃棄船

カシス酒に夏の名残りを閉ぢ込むる

踊りの灯落ちて星々生まれけり

銀河の根までは行けない万歩計

流れ星運命線の薄れけり

薄給に妻の夜長き吐息かな

赤蜻蛉空の高さを計りかね

父母の声まぼろしの刈田かな

琥珀の秋陽

工藤久美子

美術館出でて琥珀の秋陽浴ぶ

行商の声とほる路地葎の花

新障子明りの中に茶を点つる

空高し蛸干す瀬戸の海風ぎて

母似なる夫のかき込むとろろ飯

登校の列をなしたる白き息

工事場の背中で囲む焚火かな

祖谷溪の碧湛くして山眠る

筑波嶺に立ち刈田原一望に

空澄みて翼下広がる伊豆の島

いのち 一一 小六誠一郎

荒梅雨や蜘蛛の囿もなき空牛舎

雲映す早苗田空を大きくうす

キーパーは蠅虎のごとく飛ぶ

空蟬のまだ青青と抜けしまま

門火焚き父に一服火を点ける

夕立の来るぞ来るぞといふ暗さ

赤シャツの案山子確かに動きけり

月白の衣のうづしほ満ちきたる

睥睨の鴉みつめてゐる小鳥

水澄める口蹄疫の治まりて

伎芸天

桜本滋子

小鳥来る秋篠寺の空真青

ふつくらと吉祥天女寺紅葉

ほほ笑みを受けて小春の伎芸天

近づいて離れて伎芸天の秋

人去りて伎芸天女に秋惜む

朱雀門くぐれば鉄路柿落葉

玉砂利に秋の日移る古都の宮

野路菊の羨道に咲くほの灯り

行秋の古墳の闇に迷ひ込む

柿熟るる丘に抱かれ大古墳

秋

角南房子

草原の風のうねりや秋立てり

新豆腐祖谷の水より掬ひくれ

星屑を風に散らして女郎花

木犀の香りの中にある記憶

秋草の壺に里山生まれけり

電線を空に残して秋燕

物置に眠る案山子を起こしけり

こまめてふ耕運機の名秋夕焼

雲にのり月ゆるやかに渡りけり

篝火の中より爆ぜし木の実かな

春を待つ

高城登代

様様の違ひあらんや冬構

咳込みて待合室の長き事

幾重にも幾重にも雲冬の海

どつとどと溪谷下る初筏

底深く流れぬままの冬の水

冬の闇恋に身を焼く星座あり

掃けばなほ山茶花の花散り急ぐ

ふたひらの風に逆らふ冬の蝶

風花や立ち去る者のはなむけか

詩の如き師の句を読み春を待つ

黄落

谷口利子

石仏に容赦なかりし散紅葉

踏めば沈む桜落葉の佳き匂ひ

鎌首をあげて蠋螂果ててをり

にこやかに真冬も素足六地藏

綿虫の空のどこかに子守唄

満月や冬木となりし雑木山

歩が揃ふ銀杏落葉の明るさに

喝采の幕下ろすごと銀杏散る

落葉して銀杏の瘤をあらはにす

煩惱と虚飾を捨てて裸木に

一〇句抄

富阪宏己

雪積んで音なく雨の降る夜かな

二の腕のなまめかしさも梅雨の頃

茫茫と花栗真夜を咲き誇る

初夏の艶めく便器流しけり

さそり座に虹の片鱗残りたる

星月夜天女も帯を解く頃ぞ

あれからの七日七日の忌の芙蓉

草原をめだかの如く秋あかね

草履てふ草の履物夕とんぼ

著ぶくれの一枚を敷くベンチかな

朝戸出

長尾京子

朝戸出の忍び足なる秋遍路

九十九折紅葉の色の進みをり

川の字に広がりゆきし鱗雲

木洩れ日に紅葉の色のよみがへり

熊笹の中の尾根道冬隣

ふり向けば霧の中なる劔山

霧の海這ふ如上りきたりけり

尾根越えの霧の流るる早さかな

霧深く山の姿を隠しをり

灯されし瀬戸の大橋秋惜しむ

四条から

名木田純子

百千鳥声のころがる雲母坂

四条から柳の風の三条へ

一力を曲がれば都踊かな

朧夜や花見小路の京言葉

千年の古都に万年亀の鳴く

水に乗る葉擦れの音や床涼み

どこまでも秋水に添ふ貴船道

寒禽の会合もてる鹿ヶ谷

丑三つの三十六峰月冴ゆる

旅心いよよふくらむ京の雪

短日

西村正子

落柿舎へ広がる畑に残る稲架

祇王寺の二_タ間を暗め時雨雲

祇王寺の空おほふうすうす紅葉

嵯峨菊の丈なよなよと大覚寺

風沸きてひとしきり降る紅葉かな

しぐるるや詩人の歩の急がざる

紅葉且散る法則のやうなもの

紅葉且散るをせつせと掃かずとも

湯豆腐や一日風の鳴りし嵯峨

短日の帰れる距離を泊つゆとり

旅涼し

信里由美子

ほうたるの光の言葉交はす闇

蛍火のここも現し世峡深し

吊るされて水の匂ひの蛍籠

一水の激流はしる大緑蔭

霊水の千古の涼を汲みにけり

夏霧の音降る山の宿に着く

カルストに魔法かけゆく夏の霧

さみだれのカルストの黙濡らしゆく

星月夜未来へ天の動きゆく

旅涼し空一枚の大星座

風

蓮岡健美

振り向けば手を振るやうに芒原

コスモスの花といふ花笑ひをり

一花よりうねりとなりし蕎麦の花

二三戸を集落として末枯るる

アトリエにテレビン匂ふ夜長かな

よくとほる子供の声や秋簾

通るたび頭撫でくれ百日紅

夏草や忌中の庭の鎮もりて

梅雨じめり菜切包丁金気香

落書の古りし針箱梅雨籠

春から秋

與田武彦

風の声鳥の声さへ五月かな

新緑の川の流れに音響く

若者が若葉の風に歌うたふ

日が陰り庭の水やり百日紅

軒下に空蟬残し昼下り

場所とりで南瓜に負けたゴーヤかな

秋の宵犬に起されヌーを見る

秋の海波の模様に夕日さす

匂ひたつ金木犀の遍路道

紅葉のいつか来た道今歩く

秋草

米元ひとみ

谷底の石に鳴る水釣舟草

葉先まで水音吸うて鬼あざみ

鶏頭の重たく雨のあがりけり

星の郷星ほど灯る葛の花

雲よりも影のはやさよ大花野

赤とんぼ風を均してゐたりけり

寝ころべば蜻蛉も低くゆきにけり

山百合の夕映えてゐるうなじかな

女郎花いまはの夕日一身に

山裾へ芒の波の寄すばかり

寝転べば

渡辺牛二

寝転べば秋天我に降るごとし

深秋の見慣れし街に知らぬ道

柿熟るる動物病院裏あたり

穂芒のこちらこちらと戦ぎゐし

池の鯉秋日含めばすぐ潜る

秋蝶の空に道あり付き行けず

トンネルは落葉の寢床踏めば鳴る

草の実の弾けわが匂も弾けるか

丘広し犬呼ぶこゑも秋の声

それぞれにベンチたがへて秋惜しむ

星空のランデブー

富阪宏己

徳さんが天女を呼び寄せた。

腹巻を丸めたマイク片手に、宇宙のご真ん中をボウフラのように踊りながら。

♪目を閉じて何も見えず♪哀しくて目を開ければ♪荒野に向かう道より♪他に見えるものはなく♪嗚呼♪砕け散る♪運命の星たちよ

「徳さん、唄ってるつもり」

「そうだよ、谷村新司の『昴』だよ」

その時だった。天女が舞い降りたのは。薄絹の中に咲く、花のように微笑みながら。

「私の大好きな『昴』が聞こえたのよ。そうしたら、君もいるなんて。」

「あっ。花田蝶子先生ですか」

徳さんがニタリと笑って云った。

「あんたの初恋の人だ」

云うが早いか、天の川に向かって矢のように飛び去って行った。

僕は勇気をだして、天女の顔を見つめた。まぎれもなく、花田先生だ。

二人にされた僕と花田先生は、たちまち40年前に帰ってゆくのだった。花田先生は南十字星を見つめながら、

「君の事は、よく憶えてるわ。クラスで一番の音痴だったものね」

クスツと笑って見せた。

「先生は僕のがれでした。」

「光栄だわ」

花田先生は、またクスツと笑ってみせた。

「私、二十九歳までは地球の人だったのよ」

「知ってました」

「二十八の時にね、乳房失ったの」

「はい」

「女にとって、乳房は命なのよ」

「はい」

「そこまでののに、次々と転移して」

「一年、苦しみ抜いたんだ。」

「私、決意したのよ。病気になんか、負けるもんかってね。だから、私が一番綺麗だったのは、その時ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「今の私は、その時の私。ごらん、胸ないでしょ」

花田先生は両手で胸を撫で下ろした。

時々、隕石が眼の前を走った。

「先生は美しいです。凜としていて」

「嬉しいわ。私も星の世界へ来て恋をしたのよ」

「ええっ」

僕はガーンと頭を殴られたような気がした。シヨックだった。花田先生はキョトンとして星を見ている。

「松尾芭蕉って、知ってる」

「古池や蛙飛び込む水の音って詠んだ人」

「そう。私の恋人」

また、隕石が走り去った。

「息を引き取る時ね、私のベッドを囲んで泣く、父や母や、姉や妹を残して、私の魂は天に昇っていったのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「残された私の肉体にすがって泣く家族を、天に昇りながら見た時、私は辛かった。あまりにも辛すぎた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そのとき、思ったの。かぐや姫が月に帰る時のように、素敵な船が天から迎えに来てね、船には七福神や天女も乗っていてね、それぞれ、笛や弦楽を奏で、踊りながら歓迎するの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「私は嬉しそうに船に乗るのよ。お先にねって、手を振るの。家族も良かったわねえって、嬉しそうに手を振るの。盆には顔見せに帰っておいで

よって、手を振るの。みんな嬉しそうに、笑っているの」

「こんなだったら、どんなにいいだろうって」
花田先生は遠くを見る眼差しになっていた。ここから見る北斗七星は一本の棒のようにみえた。それは星の雫のようでもあった。

「芭蕉はね、こんな他愛のない私の話を、黙って聞いてくれるの。」

また、隕石がとんだ。瞬くことのない星屑が無表情に輝いている。

「私、乳がんで入院したときね、院内の俳句会に出ていたのよ。気を張るためにね。そこでは、芭蕉は俳句の神様みたいに言われてた。でもね、星の世界で出会った芭蕉は気楽な人だった。人の弱さ、愚かさ、哀しさを知りつくした人だった。ありのままの私を、そのまんま受け入れてくれる人だった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「星の世界でわね、地位も名誉も財産も、いっさい無意味なの」

静かで、やさしい声だ。

「私たちの恋は、いつもプラトニック。だって、私たちの肉体は地球に残して来たからね」

声が微笑んでいる。

「だから、心の豊かさがすべてなの」

眼を凝らすと、おとめ座銀河団が遠くに見えた。その前を変光星が灯台のように赤味を帯びてゆくようだ。

「俳句はね、季節を詠む詩なの。でも、宇宙には季節は無いわ」

「芭蕉はね、季節の変化がおきるのは、宇宙のエネルギーだって言うの。太陽の為せる業だって言うの」

「だから、宇宙でも俳句は詠めると云うの」

「今日はね、お友達の凡兆さんや、基角さんとね、宇宙の外から宇宙を見る旅に出てるのよ」

「帰ってきて、どんな話してくれるかと思うと、私ときめくの。それにね、みんなで素敵な計画を考えてるの。俳句の好きな人が亡くなったら、みんなで迎える船出すの。それぞれ胸に色とりどりの色紙をぶら下げてね、弔句じゃなく、歓迎の句を書くの。みんなで三十六歌仙巻き巻き、地球へ向かうの」

地球では星は見上げるものだった。星空の真ただ中にいる今、星は見下ろすものでもあった。それが不思議に思えてならない。見下ろしている、何かが猛スピードで飛んでくるのだった。

「おい」

声がして、一本の矢のように徳さんが帰って来た。

「小町に振られたよ。小町にゃ、男がおったよ」

「徳さんにも、彼女がいるじゃないか」

「あつ、そうか。すっかり忘れとったよ」

花田先生がクスッと笑った。

「男二人のランデブーもいいものよ」

花田先生は、またクスッと笑うと、遠くの銀河に向かって、蝶のように舞い上がった。

「どうやら、あんたも振られたようだな」

徳さんが嬉しそうに笑った。そして、おもむろに、

「小町が云うにはなあ、岡山県倉敷市日間山というところにな、小町が生きていた頃使っていた、姿見の井戸があるらしい」

「倉敷って、大原美術館があるところかい」

「そうだ。そうだ。すぐ近くだ。法輪寺という寺の傍だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「小町の井戸というらしい」

「その井戸を覗いたらな、わしの顔じゃなく小町の顔が映るんだ」

「話しかけると、小町が答えるというんだ」

「ほんとうかな」

「ほんとだよ。小町と指きりゲンマンして来たんだ」

「まいったなあ」

「さあ、行くぜ」

徳さんが飛ぶ体勢に入った。

「行くって、方向が分からないよ」

「大丈夫。大丈夫。宇宙エレベーターを使うんだ」

「宇宙エレベーターって、地球へ向かっているのかい」

「そうだ、さつき調べたんだ」

エレベーターの入り口は宇宙ステーションの入り口にあった。難しくて解らないが、時空の理論によって超高速で移動可能なのだ。

見る見るうちに太陽系へ着き、青い地球が透明な窓から、見渡せた。

静かにエレベーターが止まった。昇降口の扉が開くと、眼下に地球が待っていた。まるで、地球儀のようだ。

「ここからは、飛ぶんだ。あの辺りが日本だ。まず、日本を目指そう」

徳さんは一本の棒となると、彗星のように地球へ向かって、突き進んだ。

「見えた。倉敷が見えた。法輪寺が見える。小町の井戸も見えた」

徳さんはゲンゲン小町の井戸へ突き進む。

「ズシッ！」

地の底まで響く、鈍い音とともに、徳さんの上半身が日間山にのめり込んだ。

「大変よ！徳山さんが、ベッドから落ちたわよ」

看護師の甲高い声が響いた。同室の患者が一斉にベッドから起き上がった。

次々と看護師が駆けつけてくる。

「頭から、真つ逆さまよ」

廊下をパタパタと他の部屋の患者が、集まってくる。気絶した徳さんは、すでに虫の息だ。

小町の井戸は夢だったのだ。徳さんは病室の床

へ、頭から突っ込んでいた。

「徳山さん。徳山さん」

看護師の声は泣き声になっている。廊下をストレッチャーを運ぶ音が近づいてくる。

「徳山さん。徳山さん」

四方八方から徳さんの名を呼ぶ。ストレッチャーが病室へ入ってきた。

そのとき、徳さんの眼がかすかに開いたかに見えた。

「徳山さんが気づいたわ」

「徳山さん！大丈夫」

泣き泣き喜ぶ看護師の声の中、

「大丈夫。大丈夫」

徳さんがニタリと笑った。

青春きつぷ

名木田純子

俳句を始めて十五年になるが、十年ほど前から句友と毎月一回吟行という名の小旅行に出かけている。

県内は勿論であるが、青春きつぷが使える時期には遠出をする。

年三回春、夏、冬と使用出来るが、月を跨いでいるので、だいたい年五回ほど県外に出かける。もちろん鈍行で日帰り。

そしてどこまでも歩く。

四国、山陰は単線のため待ち合わせが多かったり、乗り継ぎ時間が長かったりと効率が悪いいため、もっぱら山陽線を使って西か東へ行く。

一番遠い所は西が岩国、東は余呉湖であるが、芭蕉が「のざらし紀行」で初めて訪れたという大津周辺の寺にはよく出かけた。

特に好きなのは近江八景の一つ「堅田の落雁」で名高い満月寺浮御堂である。

五月雨の雨垂ばかり浮御堂

青畝

鎖明けて月さし入れよ浮御堂

芭蕉

湖上の仏堂の縁に座って、湖を見ていると自分も波の上に浮いているような気分になり、いろいろなものから心が解放されてくる。

同じく近江八景「三井の晩鐘」の三井寺。

三井寺の門たたかばやけふの月

芭蕉

町中の小さな寺であるが、芭蕉が滞在したといわれている無名庵があり、芭蕉の墓所でもある義仲寺。

木曾殿と背中合わせの寒さかな

又玄

紫式部が源氏物語を執筆したと言われている

「石山の秋月」の石山寺。

石山の石にたばしる霰かな

芭蕉

芭蕉が愛したこの地には名句がたくさん残されている。その足跡を辿るのも楽しみの一つであ

る。

青春きつぷを使つて、各地へ行けるのも俳句をやっているおかげであり、俳句という共通の話題を持った句友との語らいは尽きることはない。

汀子先生が作句の心得の中で言われている、「上手に作ろうとしない」、そして「一面からものを見ない」ということを信条とし、これからも肩の力を抜いてマイペースでやっていきたいと思っている。

【編集部注】（浮御堂の句碑にある青畝の句「五月雨の雨垂ばかり浮御堂」の原句はひらがな表記で「さみだれのあまだればかり浮御堂」のようです。）

セーターの闇

石井宏幸

セーターの闇くぐる間に一決す

山田弘子 句集「月の雛」より

山田弘子円虹前主率は今年二月七日に急逝されたが、「月の雛」はその前主率の最後の第七句集として出されたものである。私はホトトギスと同時に、多くの俳誌の中から自ら選択して円虹にも投句を始めたので、ご逝去の報に接した時には本当に信じられない思いだった。

句集の名に採られた

「灯を消して月の雛としばらくを」

の句は、作者と月明かりに照らし出された雛との相問の句である。作者が見ているのは、雛であり、雛の影であり、雛を飾った記憶であり、それは受

け継がれてきた記憶でもあり、また、歩んできた自分の過去との対峙でもある。その悲しいほどに満ち足りた静けさがひしひしと伝わってくる。

一転、冒頭のセーターの句には能動的な未来への強い意志が秘められている。セーターに目を閉じて頭を潜らせる時に感じる窮屈な感覚を、闇と一語で表現し、闇と言うことにより暗中模索した過程が言外に表現されている。いよいよ寒くなった外へ出るためにセーターを着ている間に決断をした。外出は、厳しくその結論を求められる場であつたのかもしれない。作者は、セーターを着てその結論を暖めながら外へ出て行つたのである。

その一決したこととは何であつたか。今は聞く術もないが、円虹の会員一人ひとりに暖かい言葉を掛けておられた前主率のご冥福を祈らずにいない。

◆古い友人からメールが来たので、新聞のおくやみ欄で見かけた名前について聞いてみた。

ほどなく来た返事にはやはり親父さんで、原爆死没者名簿に登録されたことが書かれていた。

被爆については知らなかったと返信したが、原爆について深く考えなかった頃に、一度だけ聞いたことを思い出し、安易な返信をしたと後悔した。

送ったアンソロジーが届かなかったと言うのでホームページのアドレスを書いておいたら、しばらくしてまた返事が来た。

五号まで見つけた、三号の「ふるさととは間近に…」の句が実感を伴って分かりやすいと書いてあった。

あれっ、三号までは前に送って、同じような感想を聞いたが……。

これであいこだな。

年齢も同じなら記憶の衰えも同じぐらいということか。

もう十年以上会ってはいないが、男前で、スポーツマンで、頭が良く、女の子にもてる男だったが、今はどうなんだろうか。

よもやメタボで苦しんでいるというようなことは無いと思うが。

◆私的なことを書いてしまいました。

私がアンソロジーを送りつけて無理遣り感想を聞く、ありがたい友人です。

◆次号もよろしくお願いします。

空の色変はらずありし原爆忌

(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.6

平成 23 年 2 月 1 日 発行

発 行 合歓の会

発行責任者 富阪宏己

印 刷 弘文社

岡山県津山市

連絡先

〒701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144

富阪宏己方

次号締め切り

平成 23 年 5 月 31 日

原稿送付先

〒708-0015

岡山県津山市神戸 719-7

渡辺牛二

Email : info@nemunokai.net

Tel. : 090-8710-7067